

主体の関係性と重層性に基づいた幸福

—ブータンにおけるインタビュー調査を通して—

福島慎太郎 (こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門研究員)

Shintaro FUKUSHIMA



1984年埼玉県春日部市生まれ。早稲田大学人間科学部卒業、京都大学地球環境学舎修了。2013年4月より京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門研究員。専門は地域社会学・社会心理学。最近は人と人との関係に依りて個人を超えた現象がどのように生じているのかに関心を持ち研究を行っている。論文に「地域における重層的な境界に抱かれた幸福」(『季刊環境研究』第169号)ほか。

導入—GNHを体現する国

「ブータンを本当に幸福な国だと思うか?」。経済的に困難な生活を送る人々のもとを訪れながら農村地域を周っていた私に、インタビュー調査の行程を共にしたパートナーの通訳者が何度も尋ねてきた言葉である。これに対して自分は、相手から期待されている「ブータンは決して幸福な国ではない」という返答をオウム返しのようにするのが悔しくて、「ブータンは幸福の達成を目指している国だ」と答えていた(実際には、直接的に問いに答えることを避けていた)。しかし、今思い返してみると、もう少しましな答え方ができたのではないかと感じている。

ブータンと聞くと「GNH」を達

成している国、という想像をする人もいるかもしれない。しかし、自分は「幸福を達成した国」であるとは決して思っていない。それは、1つにはブータンの経済状況はとて厳しく、2012年時点の1人あたりの名目GDPは約3,000ドルと日本の15分の1程度であり、世界の中でも後発開発途上国(最貧国)の部類に入ること、また人口の25%程度は貧困基準(1日あたりの収入が2ドル未満)以下の水準で生活をしていることがある。ブータン人を取り巻く生活環境はあくまでも発展途上であり、衣食住整った生活環境の下で暮らしている私たちが物質的観点から「幸福な国」であるとは決して言える状況にはない。

そしてもう1つは、そもそも幸福が達成されるということがブータンという国家にとって大切なのではない、ということからくる。つまり、幸福を「達成する」ことは欧米社会には適合的な方策ではあるかもしれないが、ブータンにおける幸福とは方向性の軸を異にするものであると考えている。

ブータンは、幸福という多様性に富むものを捉え、それを達成しようとしているのではない。そうではなく、特定の形を持たないが故に常に変容する幸福と真摯に向き合い、そのバランスを折々

に整えようとしている。また、その折々の診断をする主体は必ずしも政府の「頭」ではなく、ブータン国民の「こころ」である。その意味で、ブータンは「GNHを体現する国」という方がより適切な記述であるように思う。これが、文頭に「もう少しましな答え方ができたのではないか」と記したことの1つの表現である。

本稿では、このブータンにおいて体現される幸福に少しでも接近するために、ブータン国家におけるGNH政策の概念的な意味と方策を少し踏み込んで概観した上で、ブータン国民1人1人とコミュニティという集団の双方が体現する幸福の姿について、自分の今回のブータン訪問の体験を基に記述してみたい。

GNHの総体—概念と実在

1976年に第4代国王が「GNP(国民総生産)より大切なのはGNH(国



インタビュー地へと向かう



インタビューの様子



民総幸福)」と発言したことに見られるように、ブータンは「国民総幸福（GNH）」という開発哲学を持った国家である。

このブータンの開発哲学は、あくまでも国家主導の哲学であって、国民の中に根付いたものではないのではないか、と思う人もいるだろう。実際に、今回の訪問に際しても「もちろんGNHは知っているけど、実感として感じられない」という言葉や、特に東部地域ではGNHに興味はないという意見も聞かれた。

しかし、たとえ哲学としてのGNHが国民の間に浸透していなくても、それはブータンがGNH国家でないことを意味しない。つまり、ブータンのGNH政策には、無意識のうちにも国民の幸福を実現する「仕組み」、すなわち幸福を反映させるフィードバック機能が不完全ながらも内在化している。ここに、ブータンのGNH政策の肝がある。

ブータン政府は、数年に1度のペースで無作為抽出された国民を対象として行われるインタビュー形式の質問紙調査（GNH調査）を実施している。GNH調査の重要なポイントを挙げると、指標の重点や基準をGDP（経済指標）等のいずれか1つに置くのではなく、幸福に必要な要素の「バランス」を診断し、個人・地域・時代によって異なるそのバラ

ンスを将来に生かすことができる仕組みとなっている。

そして、その仕組みは、決して幸福度を「高める」ことに執着しているわけではなく、時代時代にあったバランスを整える国民の「見えざる手」を指針として政策に生かしていくという姿勢の下に成立している¹。

このように、ブータンのGNHは、国家のリーダーの頭の中に存在する「概念」と同時に、国民1人1人に根付く「実体」を反映させる仕組みが備わった「総体」である。よって、このGNHの総体を捉えるためには、ブータン国家の上層部のGNH哲学だけでなく、1人1人の国民の生活を捉える必要がある。そこで本稿では続いて、今回の訪問で垣間見ることができた人々の生活の実体を報告した上で、そこから浮かび上がる地域発展の在り方を考察する。

調査概要

今回のブータン訪問は、日本の国際協力機構（JICA）が主導して行っているプロジェクトの一環として行われた調査研究「幸福度からみた開発政策再考に関する調査研究」に調査者として同行することで実現したものである。その目的は、途上国では欧米と違った多様な価値観をも体

現しているであろうことを仮定し、途上国に住む住民の声に耳を傾けることによって、1）途上国における幸福感の定義、2）途上国における幸福度に影響を与える要素の因果関係の2つを明らかにすることを目的としたものである。これまでにタイ、インド、フィリピンで同様の調査が行われ、その結果から、幸福というものを開発政策に加味することの意義を検討・応用することを目指している²。

本調査の特徴として、個人をベースとして調査者を無作為にサンプリングするのではなく、地域を単位としてサンプリングすることで幸福の地域性を描き出そうとしている点がある。今回の調査で訪問したのは、大きく表に記載された西部・南部・中部・東部に位置する6つのGewog（農村ブロック）および2つのTown（街）である。ここでGewogとは、ブータンの都道府県単位の地域に相当するDzongkhagの下位に位置し、ブータン全域で205存在する地域単位である。国民約70万人、面積は九州よりもやや小さい小国であるブータンの中で、1つのGewog当たりの人口および面積はそれぞれ4,500人、250km²程度であり、日本における昭和の市町村合併前の旧村単位の地域に相当すると考えてよいであろう。これら8つの地域それぞれの中から

表 今回訪問した地域と使用言語の概略

Gewog (Town)	Dzongkhag	地域	使用言語
Chubu	Punaka	西部	Dzongkha
Drujegang	Dagana	西部	Dzongkha
Gakidling (Hilly)	Sarpang	南部	Nepali
Nubi	Trongsa	中部	Mangdup
Chokor	Bumthang	中部	Bumtap
Mongar	Mongar	東部	Shar chop
Wangdue town	Wangdue Phodrang	西部	Dzongkha
Dangchu	Wangdue Phodrang	西部	Dzongkha

注) 地域は訪問順に記載

特定のサンプリング手法を用いて合計28人の住民を選定し、ブータン国内の様々な言語を話すことができる通訳者を介して、質問紙を用いたインタビュー調査を行った。なお、今回の調査全体では、100人を対象としたインタビューを実施し、全体を通してブータン各地に居住する人々の生活の実態を明らかにすることを目的とした。

平安としての幸福

急峻な山々に囲まれた山岳国ブータン、この国を訪れるのはこれで2回目であるが、遠目から見ると棚田が織りなす景観が深遠でとても美しい。しかし、ブータンの地域を周って見てまず思うことは、この外の目から見て美しい景観を織りなしているのは、地に足をつけて生活を営む人々の1つ1つの活動ということである。そして、それは必ずしも効率的で楽なわけではなく、物理的に非常に困難な状況の中で人々は日々生活を送っている。

今回、ブータンの様々な地域を周って見て、イノシシ、サル、ゾウなどの「野生動物」による獣害に備えるため、24時間の交代制で物見小屋から畑の様子を見守る人々、夫が盲目で経済的に貧しく、子どものうち1人が僧侶となり、1人を近所の人の家に預けているという女性、職を得るために様々なトレーニング(IT, コンピュータなど)を受けたが家族の地位により職を得られなかったと

いう青年など、重大な問題に直面しながら生活を送っている人は少なかつた。

そのような生活の下で、ブータン人の幸福度は決して高いわけではない。実際に、今回

のインタビューにおいて10点満点の幸福度を住民に尋ねたところ、その点数は欧米諸国さらには日本のそれと比べても低いものであった。しかし、それはブータン人が幸福でないことを意味するのではない。インタビューにおいては、現在の自分の幸福度だけでなく、理想の幸福度も尋ねられた。その結果、理想の幸福度は現在の幸福度を少し上回った程度であった。ここから、欧米諸国における限りなく10点(満点)に近づく方が幸福である、という常識とは明らかに質の異なる幸福観が、ブータン人には抱かれていることが分かる。このことは、理想と比べた際の現在の幸福度という観点から見れば、欧米社会よりもブータンの方が幸福であると言えることを意味する。ただし、ここで強調したいことは定量的な幸福度ではなく、むしろ幸福という概念に内包された文化的な特質である。つまり、ブータン人にとって幸福とは、一過性のポジティブな感情としての“Happiness”とは異なり、ポジティブさもネガティブさも包含した上での長期的視点から捉えた温和な満足(平安)に近い概念である。

この「平安」を考える際に、ブータンの幸福においては、経済をはじめとした1つの要素のみにとらわれるのではなく、要素間の「バランス」が重要であるとされることが重要な意味を持つ。そしてこのことの根幹には、幸福だけを追求する(幸福至上主義になる)と、逆に幸福は得ら

れない、という相反性がある。つまり、ブータン人にとって、幸福を自らがいかにか欲を持って達成しようとしても、それは「平安」としての幸福から遠ざける一方である、というジレンマを持つ。逆に、自分の意志とは離れたところで望みなく自然と幸福に対する必要条件が満たされれば、初めて幸福に対する十分条件の1要素になる。ここに、欧米の「幸福の達成モデル」とは異なる幸福享受のシステムが存在する。

関係性・集合性に基づいた幸福

近年ブータンにおいても、グローバル化に伴い資本主義的な精神や制度が流入し、自他の区別に基づいてその相対的な優位を追求する競争が生じている。そして、「都市—農村」「西部—東部」をはじめとした様々な地域間の経済格差が拡大している。しかし、地域内格差に目を向けてみると、地域間格差ほど深刻ではないように感じられる。

今回ブータンの地域を周って見て、1つの家の農作業を村の皆が手伝う代わりに昼食が振る舞われている状況や、村の皆が1つの家に集まって農作物の加工をしている状況、さらには村総出で葬式を挙げている状況に何度も出くわした。またインタビューでは、ティンブーで良い職が得られずに出身の村に帰ってきた若者数人に話を聞いたのだが、彼らにとっては、単に経済的に貧しくなるということよりも、「親に申し訳ない」「仕事を得られずに村に帰ってくると、村人からの目が恥ずかしい」ということの方が心理的に辛い、ということであった。さらに、「家族が幸せなときは自分も幸せ」という回答がインタビュー中に何度も聞かれたように、ブータン人にとって、自分1人だけ幸福になるということは考えにくい。つまり、ブータンにおける幸福の根幹には、幸福を構成す

る要素間のバランスのみではなく、無意識的にも家族や親せき友人、近隣住民との人間関係におけるバランスがあり、ここに地域間の格差は生じても地域内の格差は生じにくい仕組みが内包されているように思われる。そして、このブータン人にとっての「関係性」に基づいた幸福は、個人を単位として形作られているものではなく、人々の間の集合体として実在する集合的な幸福としてコミュニティ全体で成り立っているものである。

結び——主体の重層性に基づいた幸福

人々の中に形成された幸福は、自らに染みつけた経験の下で帰納的に形成されてきたもので、その多様性ゆえに、決して演繹的に政府や他人から押し付けられるものではない。しかし同時に幸福は、今回概観したブータンにおける幸福の特徴に見られるように、文化固有の集合的な性質を持つことも確かである。これら多様性と集合性は、ともすると相反するもののように感じられる。しかし、それは幸福が保持される主体が個人におかれるか、あるいは集団におかれるか、という主体の境界の定め方に帰着するに過ぎず、実際には必ずしも相反することはない重層的なものである。つまり、幸福は本来的に個人性と集団性の双方を包含したものである。

現在、グローバル化の下で広がりを見せる資本主義経済の影響を受けて、ブータン社会においてばかりでなく日本社会においても、個人主義化、自己完結志向の増大が生じる仕組みが社会に埋め込まれている。しかし、日本でも伝統的に村落に根付く個人を超えた主体としての「イエ」や「ムラ」、さらにはその主体性の基盤となる「ユイ」「モヤイ」「テツダイ」といった相互扶助関係が築かれ

てきたことも確かである。

これら主体の集合性や相互扶助関係は、ともすれば「絆^{きずな}」ではなく「絆^{ほど}し」として、個人の自由や効率性を縛る足かせにもなり得る。しかし、そもそも人は個人で独立して存在しうるものであるのか？ということを考えると、独立した個人に基づいたヨーロッパ系アメリカ人でさえ、個人は独立しているという認識が共有された文化環境との相互作用の下で成り立つ集合的な存在なのであって、個人を唯一の主体の単位と認識すること自体が不適切である。このような中で、北米社会を代表として突き進んできた個人の重要性のみを強調する社会が限界を迎えていることは確かである。意識的に主体の単位を個人に限定するところに「幸福」をはじめとする社会病理、さらには「環境問題」をはじめとする生態病理が生じていると思わざるを得ない。

人は個としての色を持ちつつ、同時にその特色が周囲と調和するための地の色も持っている。そのような中で、ブータンは個人と社会（政府およびコミュニティ）の双方で「個人主義」「集団主義」のいずれも偏重しない柔軟な「バランス感覚」を有していた。そして、そのバランス感覚の要となる人と人との間柄に応じた人間関係（≠独立した個人を単位とした社会関係）を保持していた。現在、人々の内界と外界それぞれの領域における問題とされている幸福



ブータンの棚田風景

と環境に関する問題が同時に表面化される中で、ウチとソトの2分化を超えてこれら重層的な人間の問題の本質に迫ることが、まず踏み出すべき第一歩であるように思う。

注

1 現在はあくまでも政府が定めた幸福を構成する要素に照らして人々が幸福であるかを「判断」するものである。本来的には、人々の幸福を規定している「因子」とその変化をその都度モニタリングし、指標に反映させていく必要がある。

2 調査の概略は、次のURLを参照されたい：<http://jica-rijicago.jp/docs/%E6%9C%A0%E7%A0%94%E7%A9%B6%E3%81%AE%E7%8B%99%E3%81%84%EF%BC%88%E5%B9%B8%E7%A6%8F%E5%BA%A6%EF%BC%89.pdf>

3 この知見は、あくまでも自分が対象とした28人から得られた結果の推計であって、本調査全体の100人から得られた正式な結果は、JICA研究所から公表される予定であることに注意されたい。